
賢者の師匠による剣士の弟子

超未来的マルガリ～タX

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

賢者の師匠による剣士の弟子

【Nコード】

N9470N

【作者名】

超未来的マルガリータX

【あらすじ】

これは賢者による剣士の育成物語ではなく、賢者に育成された剣士の物語で、主人公は魔法も使えなければ、気も何も使えないというある意味レアな存在ですが、体術だけで最強のドラゴンにも立ち向かえるといえるかというところなのだろうか？

魔法も1であるから体術も1だろという暴論のもと賢者に育てられた剣士の少年

ちなみに賢者は1+1で2なやつです。

ではじまりはじまりー

世界の舞台はモーレシモン界

大いなる神シモンのもと想像された世界は大いなる神の加護があるといわれている。

世界の構成は宇宙がありそこに星々が浮いている。その無限にある中の一つである

イネ＝ラドエルガ星とその星に住む生命に呼ばれている星は、あまりにも巨大で、しかしその巨大な星から生まれる重力によって死滅どころか生まれるはずもなかった生命は確かに息づいていた。

イネ＝ラドエルガ人も理論上存在できないはずの我々がなぜ存在できるのかその理由が科学が生まれた時から歴史上の天才たちが挑み

続けてきたがわからなかったためそれが神シモンの加護だといわれている。

その加護を受けているこの星こそが聖地であり楽園であると信じられてきたのであった。

プロローグ

生命は死してなお進化を続ける

頂点たる賢者としてでなく一つの生命としてここにこの言葉を残す。
ギル＝テラ

木陰で古く重そうな本でよく見ると端が擦り切れるまで読まれている。

そんな本を読んでいたのはまだ1 2 3位の少年であった。

「ロギウ＝エンペリウス！今は私の実験の手伝いで薬草摘みしているはずですが何をしているのですか。」

その少年の背後から同じ年くらいの少女が名前を叫んだ。

今ここには少年と少女しか見当たらないので、少年の名前だろう。

ロギウと呼ばれた少年はバツの悪そうな顔をして振り返る。

その眼にはちよつとした恨めしい光も見えるため、あまり良好な関係ではないようだ。

プロローグ 2

「わるかったよ。これでいいんだろ。」

ロギウは手元にあつた袋を少女に突き出すと、それをひったくるように奪う少女。

「あるならば、さつさとわたしにくればいいでしょう。そういった嫌がらせのどこがおもしろいのかわからないしわかりたくもないわ。あなたって最低な人間ね。わたしだったらどんなに嫌な人間に対しても約束を絶対に守るわ」

大人びた話し方や声音をしているが、わざわざ、自分のことをいうところが年相応の態度である。ロギウとしてはそんな気は全くなくただ単に読みたくなったから本を読んでいただけであり、別に嫌がらせをしてやるうとかさういったことではないのだ。少女との約束より本を読むほうが重要だったのである。

少女は言いたいことをいってさつさと行ってしまった。

「あれはお前が悪いのうロギウ？」

「!？」

いきなり背後から聞こえた老人の声に反射的に後ろを向くロギウ。その動きはこどもにしては無駄がなさすぎた。

「普段からそんな動きをしていたら、警戒されるぞう?。」

後ろにいたのは齡60過ぎたぐらいの男だった。しゃべり方の割に、

体はすっかりとしており、白というよりか銀に近い髪と髭が特徴的な初老の男である。

「クナタクト、おどかすなよ。というか気配をさせずに背後を取られたら誰だっておどろくだろう。」

クナタクトと呼ばれた初老の男は、「それもそうか」とつかみどころのない笑いを残して消えてしまった。あまり珍しくもない転移魔法であるが、その発動まで魔法を使おうとしているとも思わせないような態度で、消える時も何事もなかったかのようにまるで幻が消えるような感じだった。とはいえロギウはその魔法を使うことに気がついてはいたが。

ロギウは少し変わった体質で、魔力というものが全くない人間であった。

魔力がないということは誰でも使える魔法も使えなず、年端もいかないこどもが出せる指先をちょっと光らすことすらできない。まったくもって不便な体質であった。

そのの変わりにしては全くと言っていいほど代わりにならないたった一つの能力が、魔力を持っている人間の数百倍魔力に敏感であるということだった。

原理は簡単である、魔力を持つ人間は常に暖かい空気を身にまとっているようなもので、同じく暖かい空気（他の魔力）が周囲に來ても環境の変化に気がつかないが、ロギウはその暖かい空気（魔力）がないため暖かい空気の中に入ると暖かく感じるのである。

そのため、魔力に触れるとそれを感じるし、集中して目を凝らせば見ることもできる。そういうと結構便利なのではと思うかもしれないな

いが、敏感ということはそれだけ影響を受けやすいということであるからして、魔法はロギウにとって鬼門だった。

ちよつとした魔力での火でも魔力のあるなしでは数倍から数十倍のダメージ差があるのだった。

そんな、体質の少年が平和な幼少期を迎えられるはずもなく、ことごとく子供が持ち得る残虐性の餌食にされた。

子供といえど少し才のある子は初級の攻撃魔法などを放てるし、そんな子供は世界中から見たらごくごく一般的である。

ただでさえ魔法の使えない幼いロギウが、ちよつとした魔法で吹っ飛ぶ、大げさにのたうちまわると知った子供たちはロギウをおもちゃに当然のごとく扱った。

何度死地をさまよったかわからないほどぼろぼろにされたロギウを見て両親は泣いた。

「何もできない私たちを許して」と母は泣きながらロギウを看病し、ロギウに魔法を放った子供の家に怒鳴りこみに行った父は「うちの子はそんなひどいことはしていません。」と押し返され、去り際に「うちのこの魔法の練習台にしてあげているのだからありがたいと思いなさいよ」とつぶやかれたことに激怒し、その場で魔法を使い、一家全員に怪我を負わせて町の軍に捕まり牢に入った。

ロギウが住んでいた国では魔法が使えることは当たり前だったが、初級までは誰でもが使いこなせるのだが、そこから上の存在である魔法使いになるには才能と弛まぬ努力が必要である、そのために子供の親のほとんどは魔法学校に入りを子供に求める。魔法学校は学費などは一切かからない代わりに、非常に高いレベルの試験をクリアしなければならぬのだが、クリアさえすればすべてが合格になるので、こどものころからありとあらゆる方法で魔法を学ばせ、しかし平民にはお金がなく、またすぐに興味を失ってしまう子供たち

に魔法を使わせるには、ロギウは非常に良い教材だったのである。

そんなロギウに転機が訪れたのは10歳のときだった。

プロローグ 3

10歳にもなるとロギウも子供たちに見つからないように一人で外で遊ぶのが主体となっていた。

毎日のように森、川などに出掛けては朝から夕暮れまで遊んでいた。昼食などは森に一人で住んでいた年老いた猟師の男から食べられるものやナイフを使って釣り竿などの道具を作ることなど森での生活に必要なことをほとんど教えてもらった。

猟師も頻繁にやってくるロギウがかわいかったのだろう、いろんなことを教えた。

その日も猟師のもとに行き、仕事の手伝いで、自分で捕ったウサギを捌いていた。

10歳の少年がウサギを捌くのは今ではなかなか珍しい光景だった。猟師が子供のころは大抵の子供たちは親や村の大人から教わっていて出来ていたらしい。

今ではせいぜい酪農家の子供ができるかどうかぐらいではないだろうか。

「坊主、それを捌いたら血抜きをして終わったら皮をいつものようにしといてくれ。」

「あ、帰ってきたんだベルゴウムっ！？つと、今日はまた大物を捕まえたね。」

ベルゴウムと呼ばれた猟師は老齢といえど昔は冒険者で戦士をしていたと言っていただけあつてかなりガタイのよい体つきである。冒険者をやめた後も猟師になり体を使い続けてきただけあつてまだまだ引き締まった体をしている。まれに魔物やオオカミも森に出るの

でロギウも剣術を教わっていた。

おそらく今日の成果であるうメスのシカを片手で背負い、ベルゴウムの獲物であり冒険者時代から使ってきたツヴァイヘンダー（両手剣）をもう片方の手で持っていた。

「ベルゴウム、僕はいつも思うんだけどその大きな剣を持って、なんで森の中で疾走するシカをとらえられるのかな？」

以前持たせてもらった……いや持つというよりは床に置いてあるツヴァイヘンダー（中でもグレートソードというらしい）を持ち上げることができず柄を腰をかがめて握ったような体制になったことは苦しい思い出だ。

何度も見ているからあきれ顔で眺めながら言うロギウだが、始めてみたときはかなり驚いた。

「ぬ？フハハハハ！慣れた慣れ！」

それをいつものように聞いていたベルゴウムはいつものように豪快に笑い片手でツヴァイヘンダーを掲げて見せる。

「お前も大人になれば持てるさ。」とその大きく厚い手で頭をガシガシとなでられる。

ロギウ的には持てるようになっても構えた状態で逃げるシカに追いつくようなことはできないだろうな—と思っていた。

しかし、同時に男の子でもあるロギウにとって大きな剣というのはあこがれがないと言えば嘘になるのも本当のことだった。

「ほれ、手が止まってるぞ。あと、親御さんにシカ肉持ってやる」といい、喜ぶぞ。」

ベルゴウムは森で捕れた獣の皮をなめしをして革として承認相手に売っている。

そのため肉は必要な分だけ食べてあとは保存の効く燻製にしてしまおうが、ロギウが来てからというものの良く帰りに肉を持たせている。

「うん、ありがと。でも、毎日のようにシカを捕って良く森からシカがいなくならないね。」

「それは、この森がそれだけ広くまた、豊かである証拠だからだ。まあ、国土の9割以上を占める森だ。俺が一日一頭とったついでにくなりやせん。」

通称「森の国」と呼ばれるユグドヨルヘスト王国は大陸一の国土をもった国だがそれは一概に国力が強いわけではない。大いなる神シモンの創造したこの星の大地の加護が一番強く表れた場所と考えられ、どんなに木々を切ってもその森を縮められないためであった。聖地は他にも存在するが、一番広大な聖地であり、大陸の3割をこの森林が覆っている。

この森の中心にはロギウが住んでる町からも見える聖樹ユグドラシルがある。

聖樹ユグドラシルの頂上からは大いなる神シモンの住む世界への入り口があるという伝説がある。

「おい、ぼけーとしてないで早く終わりにしろ。さもないとおまえの分の肉は抜いとくぞ。」

森そしてユグドラシルの壮大さに圧倒されてぼーっとしていたロギウはその言葉にさっさと血抜き準備を始めた。

プロローグ 4

血抜きまで終わったロギウは先ほど剥いだウサギとベルゴウムが狩ってきたシカの皮をなめす為にあらず、皮についている微小な肉などを全て削ぎにかかった。なめすのはかなり時間のかかる作業であるが、もう何度もやっているロギウは手際よく削いでいく。これがついたままだと良いなめし皮ができないのである。

「ベルゴウムはさ、なんでそんなに強くなったの？」

皮の削ぎ落としもひと段落ついたところで、ロギウがそんなことを言った。

「おーどうしたんだ、いきなり。」

ベルゴウムはシカを追うときに特に魔法も使った様子もなく、純粋な身体能力だけで狩りをしている。それがわかっていたロギウは自分の境遇のことを考え、どうやったらベルゴウムのように強くなれるのかを知りたかったのである。

「いやさ、ベルゴウムは魔法も使っていないのに強いから。僕もそういう風になれるのかなって思ってた。」

ロギウが魔法が使えないことを知っていたベルゴウムは少し考えたような顔をしていった。

「なんでそんなに強さを求めるんだ。」

質問を質問で返された、ロギウはそのベルゴウムのまっすぐな視線

に射抜かれたような緊張を覚えたがそれでも答えた。

「僕は魔法が使えないから、他の子供たちみたいに、父さんや母さんを魔法使いになることで助けてあげられないし…。今だって、僕が弱いせいで心配をかけている。強ければ…自分の身を守れるくらいになれば、父さんや母さんだってもう泣かずに済むのに。そんな姿を見ていて僕は苦しいんだ。それに…」

ロギウは別に人を傷つけないわけではなかった。自分が散々魔法の実験台にされ怪我をさせられたが、それを特に怨んではいなかった。ロギウ。さすがに、一緒なって遊べと言われれば抵抗があるが、別に敵意を持っているわけでもないし復讐したいとは微塵も思っていないかった。

「それに…なんだ。」

「強ければもつといろんな場所に行けるし、世界を見ることができるから…ベルゴウムが一人で行っている森の奥にだって興味があるんだ。でも僕じゃ行けない。だからもつと強くなればいろんなものを見られると思うんだ！」

「世界が見たい」それがロギウの夢だった。この広大な大陸はもちろん、夜空に映るちりばめられた星々にもそれぞれ世界があると東の大国であるギア「カラクノートン連邦国、通称「技術の国」の科学者が言っているのを町で聞いたことがある。

科学という魔法とはまた違う法則によって存在する技術があるらしく、カラクノートンではその科学技術を応用してかなり発展した国だと言われている。最近では魔法との併用によるさらなる技術向上の研究をしていると言われている。

ロギウの眼には復讐や憎悪といったものが一切なかった。聖人君主のような全てに慈悲を与えんとするような眼の輝きではない。まるでそんな感情に支配されることが時間の無駄だと言わんとするように。ベルゴウムはそんな少し変わった考え方をする少年の眼を見ていた。

「なるほど、お前は自分のために強くなりたいんだな。」

その一言とともにベルゴウムの眼が冷たくなったことに気がついたロギウは寒気がした。

「お前は、両親に不安な思いをさせて、悲しむ姿が見たくないから強くなりたい。世界が見たいから強くなりたい。お前の欲求のために強さを求めるわけだ。」

それを言われたロギウは最初は意味がわからなかった。

「なんで！僕はみんなみたいに力を振るわない！人に悲しみをもたらす為に強くなりたいんじゃない！」

世界に屈しない力がほしいと言ったロギウであったが、それは世界が理不尽な力で自分を押しつぶすことを知っているからだ。ロギウはその力を自分の力で撥ね退けようとしている。そこに生まれる他の意思を無視して…。

「では、その強さにねじ伏せられた思いはどうする？今のお前は良い。きつと無闇に力を振るわないだろう。だがお前の欲求が他の方向にいたときはどうする。自分のためにしか力を振るわない奴は、

いずれ何かを傷つける。」

「そんなことない！」

ベルゴウムの言葉を撥ね退けるロギウは癩癩を起す年相応の子供に見えた。

「そんなに怒るな。別にそれが悪いって言うているわけではない。」
ベルゴウムはそう続けた。

「その力は、何かを傷つけ、いずれお前を傷つける。それを覚えておいてくれればいい。」

ロギウが聖人君主でなければベルゴウムもそれにしかりだ、世界の意思、理を全て一人の心で受け止めるには人の器は小さすぎる。それを人生をもつて知っていたベルゴウムはその時の傷でロギウがさらに自分の傷を押し広げないようにとおもってかけた言葉だった。

「冷たい目をしたのは真剣身をもたせるためだ。許してくれ」

そう言つてベルゴウムはまた柔らかい表情に戻った。が急に雰囲気の変わるベルゴウムに対して理解ができないのか首をかしげている子供なロギウだった。

プロローグ5

なめしの作業を終えたロギウは、シカ肉を背負って家路に就く途中だった。

あたりは森。木と草と土とたまにきのこが見える。

鳥や虫の鳴き声、水のせせらぎが聞こえる。

ロギウの家には森を通ったほうが早いため、今もそうしていた。

シカ肉は血の臭いで魔物などが寄ってこないようにベルゴウムに香草をもらい塗りたくって臭いを押し消した。なので魔物や狼に合うはずがないのであるが、なぜかロギウの目の前には狼がいた。

正確には森に不用意に入った2人の少年たちはいつもロギウを見つけると魔法を乱発してくるグループのやつらだった。一人が足をかみつかれていた。

その状況を見てロギウは関心をした。けして親しいわけではないが（というかむしろ迷惑極まりない存在）

”見捨てていない”

かみつかれている子供はもちろん、それを助けようと木の棒でどうにか狼を追い払おうとしている子供も涙と鼻水で泣き顔がぐちゃぐちゃだが友達を助けようと精一杯頑張っている。

とはいえ、狼に襲われている子は体力の消耗が激しいらしく目が虚ろだ。

「晩御飯の肉は無か…ごめん父さん母さん」

ロギウは狼くらい出れば追い払えるくらいには剣術をベルゴウムから叩き込まれていた。というか狼くらい追い払えなければこの森には入れない。いや入るが出てこられない可能性が高い。

普通ならば狼を殺して子供を助けるのだからロギウの頭にはその選択肢はなかった。狼も生きているのだ、やっと見つけた食事を自分のエゴで奪い、さらには命まで奪うことまではしたくはなかった。

晩御飯のシカ肉に思いをさせていたロギウは少し残念そうにしかし、そこで見捨てて晩御飯をおいしくいただけただけほど精神力に自信はなかった。狼を無駄に殺しても同じこと。要するに運が悪いのだ。

狼は子供の血の臭いで興奮しているのか、ロギウには気づいていない。ところどころ怪我もしている。

本来狼は群れで行動するもの、序列争いで負けたのか、ボロボロだった。

狼もかなり飢えていたのであろう、普通ならば安全なところまで獲物を運ぶのだからその場で子供を食べようとしていたらしい。

「ちょっと痛いけどごめんよ。」

ベルゴウムからもらったショートソードが鞘がついたまま狼の腹にたたきつける。

から空きだった腹に横から衝撃を受けた狼はショックで口を開いて子供を解放した、ロギウは続けざまにその開いた口に香草を塗りたくった肉を叩き込む。

「ギャボツ」

なんとも中途半端な鳴き声を出す狼は香草の臭いで肉を吐き出そうとしたが、すぐに肉だと気付いたらしくそれをくわえたままロギウ達には目も向けず去っていかうと後ろを振り向いた瞬間より大きい生物に容赦なく口の中の肉ごと噛み砕かれた。

グシャツと飛び散る狼の血を見た瞬間。即座に怪我した子供を背負いもう一人の子供の手を引っ張ったロギウが見たものは巨大なトカゲだった。

フルリザードである。ドラゴンのなり損ないといわれる魔物であるが、討伐には多少腕の利く冒険者でなければ難しいので、一般の成人男性では到底かなわない。一般とはかけ離れているがロギウでもまず勝てない。しかも、足手まとい二人を抱えた子供には逃げることも容易ではないだろう。

狼を租借する音が聞こえるが、フルリザードはきつとそれでは満足しないとロギウは直感した。

できる限り距離を稼ぎ、頼れる大人…ベルゴウムがいる小屋まで逃げ込めればまず大丈夫ろうと判断したロギウは来た道を全力で駆け出す。

すぐに咀嚼の音が地響きのような音に変わる。

「ッ!？」

後ろを振り向いたのか手を引いていた少年の悲鳴にならない悲鳴が聞こえた。

「止まるなッ！」

少年に怒鳴りつけ、手を引く力を強くした。

しかし、このままではベルゴウムのところまで持つどころか今すぐにも三人であのトカゲの胃袋に収まってしまう。
ロギウは何かないかとあたりを見回す。

(どつするッどつするッどつするッ…!?)

目線の先に木の根が盛り上がってできた洞があった。がすぐ後ろには大トカゲの口が迫っている。

プロローグ終

「がはっ」

なんとか、二人を洞の中に入れられたのだが半ばぶん投げのように二人を前へ送ったため、ロギウはその反動で後ろへ後退せざるを得なかった。

体をひねり開く口を掠めるようにして交わしたは良いが、そのあとに迫ってきたフルリザードの足に跳ね飛ばされた。質量さから来る力は、殺傷の意思がなくともその小さな体にとっては脅威となるには充分過ぎた。

おもしろいように吹き飛ばされたロギウは地面にたたきつけられ、呼吸が止まる。

しかし、フルリザードは洞の中に手を伸ばし少年たちを喰らおうとしていて、ロギウには目も向けなかった。

その間に呼吸を整え、体を奮い立たせる。なんとか立ち上がり、少年たちを助けるために、腰のショートソードを引き抜いた。

両手に構え、走り出しフルリザードの直前で飛び上がった。

「ハアッ！」

ロギウは渾身の力を込め、さらには自分の全体重をかけて隙だらけの背後から思いっきりフルリザードの頭に剣を突き立てた。

パキンツと言う無機質な音とともにショートソードは折れて、堅い

うるこには傷一つ付かなかった。

しかし、フルリザードがロギウの存在を認識するには充分だった。ロギウの身長の半分もの太さがある尻尾を振りぬかれ、折れた剣でガードするも、吹っ飛び転がり続け、大木の根にたたきつけられてようやく体が止まった。

ロギウの体は限界だった。

全身には激痛が走り、骨も折れているだろう。体は灼熱するように熱くそれがさらに痛みを強くした。

心臓の音はもちろん全身からドクドクという音が聞こえる。

視界は虚ろになるどころか、痛みで鮮明にみえる。

ロギウの頭は体の灼熱とは違い冷静だった。全身の骨が軋む音が聞こえ、指の先まで血管の血流がわかった。洞の中では泣き叫ぶ少年たちが見えた。ゆっくりと振り返るフルリザードの牙の一本一本がよくわかった。

これで自分が死ぬのかとロギウは感じた。

あの鋭利な刃に頭を砕かれて。

血の味を堪能され、魔物一部に吸収されると思った。

ゆっくりと近づいてくるその、自分の生命を奪うものを見ながら父や母に心の中で謝った。

あの優しい両親ともう会えなくなることに、悲しませることを考えると涙が出てきそうだった。

ロギウはあきらめた、この状況から生きるすべはないと。

心は生命をあきらめた。

ではなぜ、こんなにも体は熱いのだろうか…？

なぜ痛みに悲鳴を上げる…？

なぜこんなにも鮮明に脅威を映し出す…？

熱い血は体をめぐり、いつもより激しく脈を打つ。

それを感じるごとに体は熱を増す。

頭はより鮮明になり、さっき見たときより、なぜかフルリザード

の動きが遅く感じる。

自分の脈打つ音で耳が支配される。

血が巡り体を熱し目が見開かれ脈音が脳を支配する。

なぜ死を受け入れた心がこんなにも熱くなるのか、今まで感じたことのない欲望に近いそれに…ロギウは直感した。

生命が本能的に生きる意志を…。

第一章 - 1

クナタクトとともに少女の背中を追うロギウは、頼まれていた薬草以外も色々採っていた。

歩きながら鞆に手をつ込み、採取用の革袋の一つからオレンジ色をした小さな木の実を取り出して口に放り込む。濃厚な甘さが口に広がりまた、歯ごたえも良い。

「ほう、マルンの実か？どれわしにも一つ」

と言った時にはすでにクナタクトの掌にはマルンの実が乗っていた。いつものことであるのであまり気にしなかった。転移魔法である。応用すれば誰にも気づかれずに盗みがし放題の非常に迷惑な応用の仕方であった。

「ふむ、甘い。この甘さと歯ごたえは癖になるのう。どこにあったんじゃ？野生のマルンの樹などなかなかお目にかかれないうらう？」

「昔ベルゴウムに教わった。マルンの樹にはその実を食べるために多くの生き物が集まるから慣れると結構簡単に見つかる。」

その、言葉にクナタクトは目を丸くして言った。マルンの実は確かに他の生き物たちにも好物にされているが、その生き物がいるだけではマルンの樹があるかどうかはわからない。生き物にとってもマルンの樹は嗜好品なのである。その生き物たちをあてにどうやって探すのかはクナタクトには想像もつかなかった。

「おぬしは、冒険者などせんで、薬草売りにでもなった方が一生苦労なく食べていけるのではないかの？わざわざそんな体質で、冒険

者をやるなど死に行くようなもんじゃがのう」

「やりたいこともできないんじゃ生きている意味がないだろ？」

「まあ、それもそうかの」とさして気にした様子もなくうなずくナタクトだった。

「おぬしと一緒にいればいつでも食べられるしの。」

おこぼれを頂戴する気満々なクナタクトであった。

ロギウはクナタクトとその弟子である先ほどの少女、エルウナの3人で旅をしている。

10歳のころにベルゴウムの家に昔の冒険者仲間であったクナタクトがエルウナと一緒に来た時に、世界を旅しているとのことを知り、半ば無理やり父と母を説得して二人についてきたのだった。ちなみにエルウナは非常に嫌そうだったがクナタクトは快く迎えてくれた。

荷物持ちとして。

ロギウの体質にも興味を持ったようで、使えないが色々魔法の知識を教えてもらっている。魔力の流れが見えることを羨ましがられ半ば本気に目を交換しないかと問い詰められたときに「どうやって？」と質問で返してしまい、儀式を始め、今まで見たことのないような魔力の流れを目にした時は本気で失明の恐怖を感じた。

今は野宿をしているので、テントに寝泊まりしている。
最後によった村は1月位前だったかと何気なく思い返していたロギウだった。

すでに食料はなくなっている、自給自足である。

ロギウとしてはマルンの実はエルウナだけには見つからないと良いななどと願っていたが…

「む、この匂いはマルンの実ですね。師匠が持っていたらしゃるの
でしょうか？…う」

「……。」

「ふおっふおっふおっ。」

ベースキャンプに帰ってきた途端見つかった。エルウナは化け物並みの嗅覚なのだ。とはいえ、それは後天的らしく、様々な薬品をかぎわけているうちに、薬草などを探すときにも嗅覚を使うと便利らしく、意識して使い続けた結果なのである。

ロギウがこの前ピグルフォ（豚のような魔物：嗅覚が全生物上1番らしい）みたいだと言った時は魔法で丸焼きにされるところだったのは別の話だ。

好物らしい反応をしていたのですがすぐに要求されると思っていたロギウだったが、しかし、エルウナはすぐには要求してこない。

チラチラと眉間に皺を寄せてにらんでくる少女に恐怖を感じるロギウだったが、このままほっておくといつまでもこの状況が続くそう
で自身の精神衛生上良くないと感じたロギウは、くだらないプライ

ドと物欲に板挟みになっている少女に助け舟を出した。

「エルウナもほら、好きだろ。マルンの実」

革袋に入ったマルンの実を小分けにして差し出す。

しかし、まだ抵抗があるのか手を出してこない。先ほど言った小言のことを気にしているのか、しかし、あれは悪意がなかったとはいえロギウは自分が悪いということは分かっているので特に気にしていない。

そこで、もう一言付け加えた。

「遅くなって悪かったと思ってさ、だから、これはお詫びのしるしだよ。」

「う…私も手伝っていただいてる身なのに大人げなかったです。…ありがとうございます。」

ようやくしぶしぶながら受け取るエルウナの姿をみたクナタクトが「ワシもー」とつるさいので、そちらにも小分けにして渡す。

エルウナとロギウの中はあまり良くない。それはこの二年間付き合ってきたお互いによくわかっていた。相性が悪いというのである。

「ふむ、甘いのう。」

クナタクトが今度は転移魔法を使わずに手で小分けにしてもらった袋からマルンの実を出して食べてそんなことをつぶやいていた。

今、ロギウ達は人里を離れガラプスナル原林にきていた。
エルウナの薬草調達と修行のためだ。

第一章・2

ベースキャンプから少し離れた場所にロギウはいた。少し森が開け、そこには若干の草原があつた。

ベースキャンプに戻つたロギウはエルウナの手伝いは終わったし、今晚と明日の朝用の食料調達は終わつていたのですることもなく剣の素振りをしていた。とはいってもその姿はただの素振りとはちよつと異様な状況だつた。

何も無いところに縦横無尽剣を振り、時にはガードをする。吹き飛ばされるように体を投げ出したり、何かから必死に避けるように転がるような場合もある。

これはロギウが自身で編み出した修練法で、クナタクトにわざと幻術を掛けてもらっている。

その幻術に自ら深く嵌り込み。無制限に出てくる魔物や時には圧倒的に格上なドラゴン等に挑む場合もある。

もしも、幻術内で死亡した場合3日ほど意識を失う(実際に死亡させる幻術も存在する)がそれがペナルティとしてほどの緊張感が湧くため、只の素振りよりも実践的な修練になる。

最初はただのイメージトレーニングでしかなかったのだが、クナタクトが面白がり「もっとリアルにしてやろう」などと言っていきなり目の前の景色が変わり目の前に自分の数十倍の体積があるドラゴンが出てきたときにはロギウもわけも分からず死を覚悟した。もちろん幻術内で死亡し3日3晩うなされたのだがそれは別の話。

3日3晩うなされた後、クナタクトに掛けてもらえるように頼んだ。ロギウの場合は魔法耐性が0なので何があるか分からないと言われたのだが。

少年はその時初めて人に殺気を覚えた。

そんなこんなで、今はその修練をしている。

草地の近くで、クナタクトは先ほどもらったマルンの実をもごもごさせて楽しんでいた。

そもそも、魔法とは何なのか？

以前ロギウがそんなことをクナタクトに興味本位で聞いたことがある。

魔法とは精霊やマナなどと言われるが、魔法とは自分の魔力をこの世界に充満する『存在の証明』に与え、その現象を引き起こすものである。

『存在の証明』が何なのかはいまだに分かっていない。ただそれは存在し、魔力を与えることでその存在を引き出すことが出来るのである。存在の証明はどこにでもある、のではなく何にでもあるのであって、それがたとえ空想であってもそれが存在する。もちろん火等の単純でとらえやすいものであれば簡単に出すことが出来る。

要するに存在し（または想像でき）その事象による効果をイメージ出来れば後は魔力に応じて魔法を起こせる。

理論上は何でも出来るのである。新たな生命を生み出し、成長させ反映させることもできる。世界を崩壊させ消し去ることも出来るのであるが、人間を初めそこまで優秀な思考を持つ者は稀なため現存する魔法は少ない。

世界崩壊の魔法等は人の怨嗟や憎悪を使い過去何度か魔王と呼ばれる存在が発動を試みたこともあったが、いまだ成功していない。発

動はしても、それはせいぜい大陸を半分消し去る程度のものだったと言われている。

存在の証明が「精霊」等と呼ばれるのはそれに意思が存在するかがまだ分かっていなく、また意思の存在を証明するような事例が過去に存在しているためである。また、その精霊の意思を使った魔法も存在するのである。

しかし、「存在の証明」にコンタクトを求める行為をしてもその反応が得られない。書物にはそのような魔法も存在すると言うが、実際にあるかどうか過去の魔王による世界侵略で消失してしまっている。

また、意思が存在していた場合、なぜ呪文という概念で同じ現象が存在するのかが説明できない。

そのため、意識の存在はこれまで否定も肯定もされてこなかった。

呪文というものも、実際にはあまり実用的に使われないことが多い。魔法が研究され始めて「存在の証明」の存在が明らかになったことによりすぐれた魔術師にとって呪文が必要でなくなった。いや、定形化された呪文の必要性が薄れていったという表現のほうが正しい。複数名で使う大規模魔法などはイメージの統一が必要なためより正確な呪文（というよりは式に近い）を使うが、個人で放てる魔法はより個性を重視した形を使う、今まで通り言葉を使用する者、リズムやイントネーションで発動する者、体（おもに手足）を使うなど中には絵を描く者までいる。

要するにより強く明確にイメージできれば条件を選ばないのだ。

今、ロギウに掛けている幻術はクナタクトが自身の記憶をトレースして作った幻であった。

幾度となくロギウの顔が苦痛に歪む。しかしその眼光は揺るがず、

目の前にいるであろう魔物と戦っていた。

「ふむ、どこまで持つかの…」

ロギウのその姿を見ながらクナタクトは目を細めた。

第一章・3

ロギウは無数のゴブリン群れを一人で向かい撃っていた。

「ハアハア…ッ。」

目の前の一体を切り伏してもすぐ前から粗末な作りの斧や剣などが振り下ろされてくる。

幻術だとわかっていても心が折れそうになる。死んだほうがましなのではないかと幾度となく思う。

切っても切っても数が減ることはない。これを本当にクナタクトはすべて葬ったのだろうか？

しかし、生きているということは事実なのだ、目の前の光景とは少し遠い場所で思考する。

すでにロギウの手には剣はなかった。

ナイフとこぶしを使い、敵の剣をいなし・奪い・投げ・殺す。

返り血として浴びた最初に殺したゴブリンの体液に感じた不快感もすでに無くなっている。

どうすれば生き残れるのかなどという計算された思考もすでに無くなった。

ただ効率よく殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す…

ナイフの軌道はより洗練され、疲れているはずなのに一撃で魔物を葬る。

敵の攻撃をより体力と衝撃の少ない方法で避ける。

単純作業のように殺し続ける。

体からはゴブリンの血と汗で塗れ、混じり合って滴り落ちる。

体は熱くなり、よりこぶしとナイフは鮮明な線を描く。

イメージと自身の動きがシンクロされ、狙いどおりに体が動く。

だが、3年前。あの森で感じた熱を感じない。生命が燃えるようなあの感じに、
体は熱いしかし、頭が冷めていた。

冷静になっているのではない、冷めているのだ。

これが幻術だとわかっているからなのか？
それでも、切られれば、殴られれば痛みを感じる。

より深くあの時を思えば思うほど、遠くに感じる。

ただ襲ってきて沈む魔物たちを目を通して脳で見ると、冷めた頭で感じていた。

（魔物が弱いからか？）

しかしロギウはそれも否定する。
初めて何の知らせもなく幻術ないでドラゴンと対峙した時もある
は感じなかった。

フルリザードよりもはるかに強かったにも関わらず。

感じられない……。

「まさか、あれをクリアするとはのう」

ロギウたちは、火を囲み夕食をとっていた。クナタクトから称賛の声を与えられるが、ロギウの顔はすぐれない。あの森での感覚が結局はつかめなかったのである。体と頭は疲れていたが、それよりも心の虚脱感のほうが強っていた。約3時間は剣を振っていたし、体中の筋肉が悲鳴を上げていた。

それでも、わからなかった。強くなる感覚がなかった。

あの森以来、自分が強くなっているという感覚が無くなっていた。

3年間で力もついた。技術も知識も比べられないほど詰め込んだ。

それでもあの時の自分には到底及ばないと感じられた。

ロギウはその感覚を引きずり続けていた。

第一章 - 4

夕食も終わり、すっかり辺りは闇に沈んでいた。

雲ひとつない夜空には満月が顔を出し、ほかの星々の輝きを消し去っていた。

夜とは思えないほど明るいその場所でロギウは一人剣を振る。

そんな中夕食での出来事について思い返していた。

夕食の途中いきなりエルウナに言われた。

「何に悩んでいるのかは知りませんが、卓にその暗い顔を持ち込まないでください。せっかくの夕食が不味くなります。それはすなわち、頂いている命への冒涇と変わりありません。」

「命への冒涇？何を言っているのだ」とロギウは思った。

弱いから食われるのだろうか？強いから食うのだろうか？

自分も小さいときは弱かった。だから、逃げた。ただ一人、森の中で遊んだ。

今ならばやつらを全員返り討ちにできる自身があるが、そんなことに興味はなかった。

必要だから殺す、痛めつける、ねじ伏せる。必要がなければ何もしない。興味もない。

そんなことは当たり前であって、そこに冒涇や尊敬、善悪などという概念など存在しない。

ロギウはそう考えていた。

その時はどうかしていたのだろう。いつもなら「そういった考えもあるのだ」とそれ以上何の感情も湧かず黙って、食事を勧めるのだが、反論をした……いや、初めて自分の考えを他人に話したと言ったほうがロギウの感覚には近かった。

返答があるとは思っていなかったのだろう。エルウナはロギウの言葉を聞いてはじめは目を丸くした。

聞いているうちに興味なさそうに「ハント」と鼻で笑うような態度をした。いつものエルウナには感じられない仕草だったため、それをロギウは良く覚えていた。

それ以来、何も言うことがないというように黙って食事を終わらせ、さっさとテントに入って行ってしまった。

「命への冒涇？」いくら考えていてもロギウにはわからなかった。

今日はロギウが見張り番なのであった。クナタクトもエルウナもそれぞれテントで休んでいる。

その夜の時間を修練に使い素振りをし続けるロギウ。

実践的な感覚で剣を振るのは肉体の鍛錬というよりは精神の鍛錬に近いものだと考えているロギウはどれだけ体がぼろぼろになると素振りを欠かさなかった。

肉体の強化になるのに加え、身体が軋み、痛むことで、さらなる精

神修業になるのだ。

一振りするたびに骨は軋み、筋肉は張り裂けそうになる。その痛みにも眉ひとつ動かさず。まったく同じ型で剣を振り続ける。しばらくすると、別の型を作りまた振り続ける。そうして夜は更けていった。

エルウナはなかなか寝つけていなかった。テントの中、ただ布の天井を見つめながら夕食のことを考えていた。

「命への冒涇？こいつは弱いから食われたんだ。俺たちは必要だから食ったんだ。それ以外に無い。」

確かに命を無駄に殺すことは俺も好きじゃない。しかしそれはそれすらにも生きる意志があるからだ。

悪だの正義だのなどはそんなものすべて人間が勝手に考えたものだ。

そして、すでにこの器の意志は消えたんだ、冒涇だのなんだのは関係ない。俺はこいつが必要だから食うそれにつまそうに食うも不味そうに食うも関係ないんだよ。」

少女はその少年の考えを実に野蛮な考えだと思う。命をつなぐには命を喰らう必要がある。それはどうしようもないことだ。

だからこそ糧になってくれた命には感謝をしなければならぬと感じているのだ。

それは、今まで出会って、お世話になってきた人たちとのかかわり合いに近いものだ。エルウナは考えていた。両親やクナタクト、ほかのも大勢の人々がいて今の自分がいる。

そして、それは糧となってきた命にも共通することではないだろうか？

親愛の念や友情、尊敬などは抱けないが、それに感謝しありがたきおいしく頂いて自分の命をより高みへと導くこと、それが糧となつた命へささげるものではないかと考えている。

生物だってそうである。人間ほどの高度な精神は感じられなくても、純粹にそれを行っている。生まれ食い生んで育みそして死ぬ。進化という高みへの道を着実に何の疑問も抱かずに進んで行っている。自分の器では達成できなかった高みへの道を子供たちに与え。その子供たちも、自分の子らに引き継いでいる。何万年、何億年とそれを繰り返し続けている。

それをあの少年は自分の中の狭い小さな世界しか持っていないくせに否定した。

それがどうしても我慢ならなかった。ひどく滑稽に思えた。なんで私はこんなくだらない人間などとともに旅をしているのだろうと疑問に思った。

だから普段は隠していた自分をほんの少し出してしまった。

でも、そんなことはどうでもよかった。

今はこのイライラのせいで寝付けないことにイライラしていた。

第一章・5

エルウナがこのままでは夜が明けるまで永遠に悩んでいそうになると、遠くから獣の唸りが聞こえた。どうやら獲物を見つけて群れで襲いかかっているようだった。

「ふん、ロギウも食べられてしまえば良いんです。」

そう言って少しイライラがスッキリしたのか、しばらくすると落ちて着いた寝息が聞こえてきた。

エルウナの言ったことが現実になるように今、ロギウはクマのような大型の魔獣と戦闘状態だった。

4 mはあるつかという巨体に灰色の毛が満月の光を反射させ銀髪のように見える。

額からは3本の長さが不均等な角があり、血がたぎるのに呼応するようにほの暗い赤い発光を不規則に明滅させている。

不自然なほど長く発達した両腕の間接からは鋭い骨のようなものが突き出していた。

満月で興奮状態にあるのか興奮状態にあるようで、荒い息の音が聞こえる。

それに対しロギウは全身疲労からなる虚脱感と痛みでコンディションと言えば最悪に近い状況だった。

しかし、その目は目の前の魔獣に勝るとも劣らない眼光が宿る。

ロギウが一度深く吸った息を止めた瞬間が始まりだった。

先に動いたのはロギウで、その手に持った剣を肩の位置に構え剣先を前に突き出すような型を取って全力で突っ込む。

魔獣は下から上へと縦に剛腕を振りぬく。

腹のあたりまで腕を引き付け当たりそうになる寸前に構えた剣先を真下へ向け振りおろす。魔獣の手のど真ん中に突き刺さるが、衰えない勢いでそのまま腕を振りぬく魔獣。

その勢いに前転するように腕の上に飛び、

自身の体重と振りぬかれた腕の力を使い剣を抱え込むように振りぬくロギウ。

肉と骨を巻き込んで抉るような音と共に肉片と体液が飛び散る。

ロギウが持っている剣はあまり切れ味のよい状態でなかったのが逆に肉を絡め捕り腕を蹂躪した。

魔獣が激痛に悲鳴を上げると同時に額の角から雷撃を迸させるが、ロギウは気にも留めずに腕を両断しても有り余るその回転力を利用して剣先を魔獣の脳天に突き立てる。

やすやすと頭蓋骨を貫通し剣の刃が全て埋まる。

魔獣の返り血がロギウの頬を赤く染める。

頭部を貫かれ絶命する魔獣に興味を失ったように眼光の輝きを消すロギウ。

体格で劣っていたロギウではあるが、それを補って余りある体術と剣技で明らかにロギウは魔獣にとって強者だった。

「生命の意思が聞こえない…」

血が滴る剣を見ながら、そうつぶやくロギウ。

「ほう、また派手に散らかしおつて。これでは他の魔獣が血の臭いに誘われて寄ってきてしまうぞ」

いきなり背後から聞こえた声に驚きを隠せずに瞬時に振り替えるロギウ。

何時からそこにいたのか、クナタクトが魔獣の亡骸のそばに立っていた。

気付かなかった。いつものような転移魔法なら魔力を感じる。たとえばいくら興奮状態であったとしても周囲には気を張り巡らせていたのだ。仲間が近くにいた場合複数相手になる前に仕留めておきたかったので多少強引な戦い方をしたロギウであったが、クナタクトでなかった場合確実に殺されていた。

歴戦の魔法使いである事は関係ない、今ここにある現実が自身の生死に直結するのだ。死んだあと言い訳しても意味の無いことの分かっているロギウはクナタクトの底知れぬ実力に戦々恐々した。

「おぬしは疲れているようじゃの。ほれ、ここはわしが処理をして後の番もやっておく。今日はもう寝ておけ。」

いつもの、寝ぼけたような眼であったが、今はどこか違う雰囲気を感じたロギウはおとなしくその好意に従った。

魔獣から食べられそうな部分を剥ぎ取ったロギウは残骸を魔法で燃やすようにクナタクトに頼むと、返り血を洗い流すため沢へ向かった。

昨晚の獣の雄たけびの主は今エルウナの目の前にあった。

まさか、本当にロギウが獣と戦っていたとは思ってもみなかったエルウナはそれが今日の朝食に出てくるなどとは思はずもなかった。肉は話に聞くと筋張ってあまりおいしくないようなイメージだったが、思いのほかおいしかった。

ついでに本当にロギウが痛い目に合っていたということ、昨日のイライラはウソみたいにすっきりしていた。

そんな自分をちょっと歪んでると感じながらも、さすがしい朝を迎えたエルウナは今日も薬草の採取と新薬の調合である。医薬ギルドに登録しているのも、そこからの依頼であった。ギルドはほかにも魔物などの研究・改良のための捕獲ギルド、魔物による被害対策である討伐ギルド、文化遺産などを調査・発掘するためのレンジャ―ギルド、賞金首の処理を依頼されるブラックリストギルド等多種に渡る。なぜこれまで多様化したのかというところと各々の目的が違ったため、もともとは一つの組織だったのが徐々に分裂し、それぞれの目的と理念をより発展させた結果であった。

そんな中ギルドにもやはりランク付けがあり、医療ギルドもそれに準じる。

新薬調合となれば、12歳の少女がその依頼受託資格を得るのは異例のことであった。

単に新薬調合といっても下種新薬調合、上種新薬調合、特殊新薬調合の3つの資格がある。ほかに、医薬投与や外傷治療等もそれぞれ下種、特殊まである。

12歳という若さで下種とは言え新薬の調査を行うそのセンスには天賦のものがあり、それにおごることなく努力し続けた結果としては当たり前前の成果である。

12歳という若さが浮足立っているがそれは本来のエルウナを見たものではないので、エルウナ自身特に気にしていなかった。

今作っているのは新薬といっても、既存の薬の効能を効率よく持たせるための黄金比の確認だ。

そのために多量の薬草が必要なのだ。ガラプスナル原林ではそれに必要な薬草がすべて手に入るのだった。

効能としては体力回復と回復力強化の二つだ。

両方とも単体での効能の薬は存在するのだが、戦闘時にもっともよくつかわれる薬の二つであり、一瞬が生死を分ける戦闘では一度に服用出来るほうがよいのだが。単純に混ぜると効能が半減してしまうのだが、どうやら調合の比率があるらしく、今回はその調合比率を完成させるのが依頼であった。

クナタクトに言わせると「二つを合わせてより効能を高めるならまだしも同じ効能なんそのものを作ったって意味ないじゃろうが。まあおぬしの修業には丁度いいかの？」なんてことを言われたことをエルウナは覚えていた。

（クナタクト様そうはおっしゃいますが…私にはまだまだ難しいのです。）

サラツと言われてしまい。心に突き刺さるものがあったエルウナはその言葉を思い出してしまいさらに気分が滅入ってしまう。

すでに1カ月以上経過しているのだ。そろそろ完成させなければ呆れられてしまう。とエルウナは考えていた。それが恐ろしく、余計

に気分をあせらせる。

エルウナは『自身がなぜ薬を作っている』のかをこのときは完全に失念していた。

先ほど出来上がったばかりの薬をなめてみる。

ものすごく苦い味に眉を顰めるが、それとは別にほのかに体の奥から力が湧くように温まる感覚がある。

(また失敗だ…。)

薬の入った袋を乱暴につかむと、そのままテントを出て隣のテントへ誰の断りもなくズカズカとはいって行った。中ではロギウが疲労回復の効能のある葉を全身に貼り付け包帯を体に巻いている途中だった。

同じ年頃の異性の上半身を見ても、特に気にした様子もなく、ロギウもまた、いきなり入ってきたエルウナにも特に気にした様子もなく振り向く。

半ば怒鳴りつけるように口を開く。

「ロギウ！あなた、昨日訓練した後にくるくに休みもせずまた魔物と戦って体が疲れているのではないですか！」

エルウナは決まって失敗すると失敗作（それでも体力は回復するが…）を持っていくのだ。

袋を無造作に前に突き出すと半ば押しつけるようにロギウに渡す。

「あ、ありがとう…。」

少し驚いているようだが素直に受け取るロギウ。

しかし、そんな少年にたたみかけるように言葉を紡ぐエルウナ。

「その代わり、昨日とってきてもらった薬草をこの袋いっぱいにつけてください!!」

昨夜の夜の出来事はお互いに全く気にしていないようだった。

「うえ…またか。まあエルウナの薬は良く効くし、しかたないかわかったよ。」

に素直に承諾する、そんな少年の純情態度を見て若干心苦しくなる少女。

(う…、失敗作だなんて言えません。)

エルウナは少年に失敗作だと伝えずにできそこないの薬を押しつけて、その対価として有無を言わずこちらの指定のものをとってこさせることに若干の良心の痛みを感じる。

「ゆ、夕暮れまでに取ってきてくれればいいので。よろしくお願ひします。」

そのまま踵を返しテントを出ていくエルウナだった。

登場人物紹介

ロギウ＝エンペリウス

13歳

魔力が全くないというありがたくない珍しい体質。副作用として魔力に敏感で、集中すると見ることもできる。性格は基本は素直というよりは変にプライドが無いので頼まれごとは特に気にした風もなく行う。また好意に対しても特に勘ぐることなく受け入れる。他人に興味が無いのも手伝って、コミュニケーション上発生するコンプレックスや嫉妬などは一切感じないので人を嫌うことも好くこともあまりない。しかし、客観的な評価ができるので、すごいものは素直にすごいと心から思える少年。

ただし、生命というよりも存在のあり方に独特の考え方を持っていて、有るものはそれ以上でもそれ以下でもないと考えており、そこに複数の意味も価値もない思っている。

10歳のころにあつたことをきっかけに生に歪んだ執着を見せる。魔法が使えないので、魔法に対する防御もゼロ。魔法との相性は最悪といってもいいが、魔力の流れが見えるので対処ができないわけではない。基本武器には剣を使うが、体術もクナタクトから教わっている。

エルウナ

12歳

どこかのお嬢様らしいが詳しいことは公開していない。

ロギウより先にクナタクトの弟子として共に旅をしていた。

ロギウが一緒になった時非常に嫌がったが、表立って反対できないのはエルウナも実はクナタクトに半ば無理やりついてきたためであった。

調薬師を目指しており、この歳にしてはかなりの実力を持っている。

魔術も使え、戦闘はあまり好まないのだが、戦闘スタイルは魔術師。

調薬師になる上で欠かせない嗅覚を鍛えに鍛えぬいたため嗅覚で薬草を探すという化け物じみた特技がある。ロギウのことは認めてはいるのか、しかしあまり好意的とは思えない態度をとっている。

クナタクト

67歳

賢者と呼ばれる魔法使い。

ロギウの魔力の無い体質をおもしろがり旅のお供に加えている。

ロギウの剣の師匠であるベルゴウムとは冒険者時代の仲間である。

賢者といわれるだけあってその魔法技術は計り知れない。ロギウもエルウナもクナタクトが呪文を唱えているところを見たことが無い。魔法使いではあるが、体術も使える。

転移魔法で良くロギウのおやつを分けてもらう（本人いわく）のが好き。

好物はマルンの実

ベルゴウム

68歳

70近くとは思えない肉体の持ち主。筋骨隆々でツヴァイヘンダ
Iを構えた状態で楽に逃げるシカに追いつく化け物。その剛腕から
繰り出される斬撃は樹齢1000年の大木も両断する。
ちなみにその両断された木は今ベルゴウムの家になっている。

魔力量は少なく。基本的に肉体が武器な人

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9470n/>

賢者の師匠による剣士の弟子

2010年10月16日00時14分発行